

# シニアが生きる

□中■

土曜・日曜は、わしらのウイークデー。機械部品などを製造する加藤製作所(岐阜県中津川市)が高齢者の募集を始めたのは二〇〇一年二月。新聞に挟んだ折り込みチラシに載った文字は「意欲のある人求めます。男女問わず。ただし年齢制限あり。60歳以上の方」。本当に六十歳以上ですかと問い合わせが殺到したという。

**求人募集に殺到**  
きっかけは、同社が導入したプレス機などの高性能製造設備。当事務専らだった加藤景司社長は、

稼働率を上げようと頭をひねった。民家が近いため、遅くまでの残業はできない。悩んだ末に出した答えは土日に稼働させることだった。問題は人

## 加藤製作所

出だったが、地元にも多い高齢者の人たちらを活用できないかと考えた。調べると、地元の人口の二〇〇程度が六十歳以上。しかも、暇をもてあましている人が多い。期間工やフリーターなどを扱う手もあるが、多くの人材を集めるのが大変な

うえ、雇用コストも高い。それならば、低い時給で働いてくれる高齢者の方がいいと判断した。応募者は百人を超えた。採用は十五人。当初は足手まといになると一緒に働くのを嫌がる若手社員もいたが、「会社の利益を維持し、雇用を守る

るには、高齢者を活用するしかない」と加藤社長が説得した。実際、高齢者の時給は八百円で、土日のみ年間九十日働いた者の年間給与の合計は、正社員一・五人分の十五人分の給与の合計よりも高卒の新人社員よりも早く慣れたという。今は、会社が休日出勤し、手取り足取り仕事を教えた。覚えるまでに時間がかかったが、それでも高卒の新人社員より

増えた。「仕事を覚えるのも大変だから、できるだけ長く勤めてほしい」と加藤社長は期待する。

**地域貢献に一役**  
もともと鮮魚店のおかみさんだった鶴飼照美さん(67)は、「経験が全くないから不安だった

し、実際会社の仕組みや道具を覚えるまでは、たいへんだった。だが、慣れば仕事は楽しい。友達もできた。給料もこの年でこれだけもらえば十分」という。プレス加工で働く伊藤照幸さん(63)は「足手まといにならないよう、精いっぱい働いている。動くから体の調子もいい。生活資金の一部にもなり、助かっている」と喜ぶ。

現在、同社では二十三人の高齢者がパート社員として働く。平均年齢は六十六歳で、最年長は食堂で働く八十二歳の女性だ。「いまや高齢者は会社に欠かせない中心的な存在になっている。高齢者自身も喜んでくれる。地域にも貢献できるなどいいことづくめ」と加藤社長は指摘する。

# ベテランの技能有効に



加藤製作所の工場で働く鶴飼さん(写真上)とプレス機を操作する伊藤さん(同下)

## 低賃金でもやりがい